

特260

565

砧

昭和改訂版
外三

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



砧

(梗概) 筑前國芦屋の某、自訴の事にて都より上り、早くも三年過ぎぬるより故郷のこと心許なく、今年暮には必ず歸國すべしとて、召し使へる夕霧を下しぬ故郷よは妻一人、夫の歸國のこ今日明日かと待ち焦れ淋しさやる方なかりしが、夫の言傳をもたらして歸り來し夕霧にも恨みを述べ、せめてもの心慰みにと、二人して砧に向ひ、ほろ／＼と歩つ槌に蘇武が古事を思ひしが、夫は今年暮にも亦た歸國し難き昔の便りをうけて妻の悲歎やる方無く暫し病床に臥して後盡きざる恨みを抱いて終に空しくかりたり。それとも知らず歸國せる夫は、亡き妻の跡を懇ろに弔ひしに、妻の亡魂現れて恨みの数々を述べ、因果の妄執、地獄の苦患など物恐ろしく語りしが、法華讀誦の功力にて漸く成佛すること、なりぬ。



シテ 蘆屋某の妻
ツレ 待女夕霧
後シテ 妻の靈
ワキ 蘆屋の何某
後ワキ 前ワキ同
ワキヅレ 蘆屋の從者

所 筑前國蘆屋
季 秋

砧

わき

詞

是も丸あせ戸屋の何某よそひ、我自訴の
事ありまよりまよふは、儀初のまよふ
ぬらひつれを、あるま二年に成りそひ、餅り
は、おん乃るみんえなくし程ふ、石後ひひ
夕霧と申女を、おん下さむと、なひひ

ふさふさ此下よいらうしなるささひをさし一ぬ
比目此枕の上よを波を隔つる慈ひら
里海してやうとた妹背の中か目
世をたよぬぶ草も我もさうぬきるをさ
たぐ神に降れる波の雨乃晴る影もさ
心うら つ 夕や方があがりしひさしそわく

中一入 何夕あかち中あつ珠く一や
人にもあるま一はか入あつしふ夕
あか珠く一あぐら根一や人丁そ替り果
終ふ世風の形流れ使りふもさよやさる候
あうりなる つ せんこひさくふもありの夜を
ゆひしあひあまはみやけの隙もあつてん

よりの卯子二年とすかよし我らひひーが
何れ位居をふの外とや思ひひまきげふ
おぬの花を厨に多きおとよごに思
ふにれおむび我りー 日 節の位居又秋を
義の人目もまの枯の葉りも臨果ぬ
何を頼ん身の形漢 上 二年の秋れあ

あはばか〜真の心はゆるもせぬとひお
いふよおの昔をさぬりぬもさー ちんちんや
傷のまは申さつせぬしうさうり人の心乃
義妹〜い〜おれ心かぬ思成きる
頼む 詞 ちんちんや〜あはばか〜いに當〜
何れ〜ん拍者のあはばか〜あはばか〜何れ〜ん

かへりて^しかゝる^かが^か睡^い入^いの^い砦^いを^いな^いま^いし^いと^いし^い
や^い其^いの^い真^いの^い信^いよ^い好^いむ^いる^いは^いれ^いさ^いひ^いあ^いり^いし^い
そ^いや^い唐^いは^いよ^い薩^い武^いと^いそ^い一^い者^い胡^い國^いと^いそ^いや^い
ら^いん^いよ^い移^いさ^いれ^い一^いふ^い故^い郷^いに^いと^いめ^いさ^い一^い妻^い
や^い子^いれ^い夜^い守^い乃^い力^い保^いえ^いを^いと^いひ^いや^いり^い高^い樓^い
ふ^いお^いし^い一^い砦^いを^いう^いつ^い表^いの^い末^いに^い留^いり^いける^いり^い美^い

里^いの外^い成^い薩^い武^いが^い旅^い之^い様^いり^い故^い郷^いの^い砦^いに^い
い^いま^いし^い一^い唐^いは^いよ^い薩^い武^いと^いそ^い一^い者^い胡^い國^いと^いそ^いや^い
ら^いん^いよ^い移^いさ^いれ^い一^いふ^い故^い郷^いに^いと^いめ^いさ^い一^い妻^い
や^い子^いれ^い夜^い守^い乃^い力^い保^いえ^いを^いと^いひ^いや^いり^い高^い樓^い
ふ^いお^いし^い一^い砦^いを^いう^いつ^い表^いの^い末^いに^い留^いり^いける^いり^い美^い

身ミのミ田タひヒちチをヲ遊ユばバるルよヨしシづヅくク如ニキキミミリリ
 ろロうウ言コトくクたタつツそソ風カゼ北キタよヨめメぐるルトト遊ユばバるル
 ゆるユくク急キウにニてテ月ツキ西セよヨ流ナるルトト遊ユばバるル
 旅ツ寐シのノ水ミヅのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタをヲまマわワれレおオもモりリ
 あるアル秋アキのノ風カゼもモおオくクれレおオもモるルのノ心ココロもモ
 携ヒふフよヨおオのノ心ココロをヲ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 携ヒふフよヨおオのノ心ココロをヲ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス

おオのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 乃ス碁イ北キタありアリそソ入イてテおオのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 餘ホりリはハ吹フてテおオのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 見ミゆユあアらラぶブおオのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 けケ夜ヨ讀ヨミりリあアるルもモとトおオのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス
 さいサイはハほホしシもモ夜ヨのノ心ココロはハ東ヒガシ北キタのノ心ココロもモせセまマすス

露^{ツキ}も^{ツキ}契^{ツキ}り^{ツキ}の^{ツキ}葉^{ツキ}も^{ツキ}一^{ツキ}や^{ツキ}君^{ツキ}り^{ツキ}命^{ツキ}の^{ツキ}長^{ツキ}た^{ツキ}
 此^{ツキ}月^{ツキ}も^{ツキ}は^{ツキ}沖^{ツキ}も^{ツキ}輝^{ツキ}ら^{ツキ}ま^{ツキ}ぬ^{ツキ}ま^{ツキ}さ^{ツキ}く^{ツキ}夜^{ツキ}
 う^{ツキ}さ^{ツキ}よ^{ツキ}か^{ツキ}の^{ツキ}七^{ツキ}夕^{ツキ}此^{ツキ}契^{ツキ}り^{ツキ}も^{ツキ}ち^{ツキ}一^{ツキ}葉^{ツキ}斗^{ツキ}
 里^{ツキ}の^{ツキ}り^{ツキ}夜^{ツキ}天^{ツキ}此^{ツキ}川^{ツキ}波^{ツキ}た^{ツキ}ち^{ツキ}留^{ツキ}る^{ツキ}邊^{ツキ}
 瀬^{ツキ}甲^{ツキ}能^{ツキ}あ^{ツキ}た^{ツキ}浮^{ツキ}船^{ツキ}乃^{ツキ}輝^{ツキ}の^{ツキ}葉^{ツキ}も^{ツキ}り^{ツキ}ま^{ツキ}
 家^{ツキ}海^{ツキ}ふ^{ツキ}つ^{ツキ}の^{ツキ}神^{ツキ}や^{ツキ}志^{ツキ}る^{ツキ}る^{ツキ}ん^{ツキ}氷^{ツキ}り^{ツキ}

け^{ツキ}さ^{ツキ}あ^{ツキ}く^{ツキ}は^{ツキ}浪^{ツキ}赤^{ツキ}も^{ツキ}せ^{ツキ}ま^{ツキ}う^{ツキ}た^{ツキ}の^{ツキ}い^{ツキ}上^{ツキ}交^{ツキ}
 月^{ツキ}七^{ツキ}日^{ツキ}此^{ツキ}感^{ツキ}や^{ツキ}八^{ツキ}月^{ツキ}九^{ツキ}自^{ツキ}ま^{ツキ}よ^{ツキ}ま^{ツキ}の^{ツキ}さ^{ツキ}ふ^{ツキ}
 長^{ツキ}き^{ツキ}も^{ツキ}夜^{ツキ}子^{ツキ}あ^{ツキ}う^{ツキ}か^{ツキ}声^{ツキ}の^{ツキ}う^{ツキ}た^{ツキ}を^{ツキ}入^{ツキ}る^{ツキ}あ^{ツキ}ら^{ツキ}
 昔^{ツキ}も^{ツキ}や^{ツキ}月^{ツキ}此^{ツキ}る^{ツキ}風^{ツキ}の^{ツキ}ま^{ツキ}し^{ツキ}ま^{ツキ}お^{ツキ}お^{ツキ}お^{ツキ}
 今^{ツキ}も^{ツキ}心^{ツキ}ま^{ツキ}よ^{ツキ}あ^{ツキ}お^{ツキ}あ^{ツキ}よ^{ツキ}此^{ツキ}ま^{ツキ}る^{ツキ}あ^{ツキ}ら^{ツキ}風^{ツキ}
 昔^{ツキ}一^{ツキ}女^{ツキ}の^{ツキ}あ^{ツキ}ら^{ツキ}思^{ツキ}れ^{ツキ}音^{ツキ}波^{ツキ}さ^{ツキ}り^{ツキ}つ^{ツキ}て^{ツキ}な^{ツキ}る^{ツキ}あ^{ツキ}ら

後ほろろく〜
ヤラ 後ほろろく〜
ヤラ 後ほろろく〜

のさるやらん〜
ヤラ のさるやらん〜

まていゆぐ〜
ヤラ まていゆぐ〜

ま〜きゆ〜
ヤラ ま〜きゆ〜

のまよもほつり〜
ヤラ のまよもほつり〜

ぶ左様ふ〜
ヤラ ぶ左様ふ〜

ねめ〜
ヤラ ねめ〜

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

〜
ヤラ ……

おちよーも染りー妻よのーいふれふー

いほ借よて終のふらきと成きるそや

ろ上ーいりふー^{わき連合}いふれ

んたぬ梅のしもなむいふくは

のほよりもこなむのなるそとつくり

梓のぞれ^{わき}いふくは^{わき}いふれ

出羽

いづ瀬川^{いづ}いふれ

うたのいのをきくむさるはくぬ

上ーいりふー^{わき}いふれ

飛一迄のなるへのほらぬるぬの目を

いんまる^ト去ぬぐ我を野煙の世業

ま思ひねるのふらきぬるいふれ

ざりー報ひねるのなるいふれ

て獄卒阿るうらせの乃標此数なる
 隙もあくうてやくとむくひの砧根あ
 かりける因果の高観 用らま此妾
 ぬのちひれおんだ砧よかきば涙をこへつ
 火焔と成てむねの煙れほのふよむ
 せむせむせむせむのせむせむ 砧もあるあく

松風もすこぶるまき此夢のこ怖路
 やあ上羊此あゆみ隙を弱くうはり
 行ある六の道因果此小車の火を此門
 をおされがめぐりもぐれは生れ死の海はを
 みる海やあぢきまなほの浮世や ねみ
 をるの紫乃 浄里りて執心の

338
793

内務省
納本

著作權所有



昭和十一年九月廿五日印刷
昭和十一年九月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上野櫻木町四十八番地

著者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謠本刊行會

に成るなりともさくば候初よ、持一、此
あうの由ひくる法乃、母ん、さう提の種
と成るなりともさくば候初よ、持一、此

終

